

# 日本語教育史研究の展開

## キリシタン時代の研究を例に可能性を探る

小川誉子美（横浜国立大学）

ogawa-yoshimi-tr@ynu. ac. jp

### 【要旨】

本稿は、日本語教育史研究と養成課程における日本語教育史科目の関連について論ずるものである。一例として、16～17世紀の宣教師の日本語学習をとり上げる。キリシタン資料に関する研究は、フランス人によって19世紀に着手され、日本語教育の分野で、1970年に注目されて以来、主として、言語や言語行動を対象に紹介されてきた。キリシタン時代に関するあらたな研究が次々に公開される昨今、日本語教育史研究のアップデートが求められる。本稿は、現在の実践への気づきを促す例として、日本語力の評価法、教材となる素材選び、学習方法、教師の役割などの点から、専門日本語教育の成功例として現代的視点から分析する可能性について論じた。今後、日本語教育史の中の史実を素材に、歴史を振り返るコツや楽しさが共有されていくことを期待したい。

### 1. はじめに

歴史研究はテーマのもと、資料を収集し、分析・精査、クロスチェックを経てあらたな情報を引き出していく。根気のいる作業ではあるが、内外の研究者ネットワークでの議論や思いがけない資料との出会いや新たな価値の発見により、歴史探求の世界に誘われその醍醐味にとりつかれていく。歴史研究は、現在の視点、研究者の関心から進められるが、本稿では、さらに日本語教育史<sup>1</sup>という科目への応用について考えたい。実学である日本語教育の場合、現在の教育現場の課題と結びつくと、その史実への関心は高まると思われる。そのような現在の教育実践を見つめ直すきっかけとなる視点とはどのようなものだろうか。日本語教育学の一領域としての日本語教育史から得た知識が、現在や未来を考えるきっかけとなり、日本語教育史の中の史実を現在の実践と関連付けながら学べるようにするには、どのような視点が必要なのかについて考えていきたい。

そこで、まず、これまでの歴史や言語教育史の研究目的についての議論を紹介しよう。英語教育史の立場から、江利川春雄は、数々の著作の中で、英語教育の未来を考えるためには、過去の日本人がどのような英語教育を行ってきたのかを踏まえることが大切であり、歴史を振り今後に活かせるヒントを探ることの重要性を主張する。その姿勢は著書のタイトル「歴史から学び、現在を問い、未来を展望する」にも一貫して示されている。また、自著『日本人は英語をどう学んできたか—英語教育の社会文化史』（2022）の冒頭には、ヘーゲルの『歴史哲学講義』から、「経験と歴史が教えることは、人民や政府はかつて歴史から何も学ばなかったということであり、歴史から引き出される教訓に従って行動した

---

<sup>1</sup> 「日本語教育史」は、登録日本語教員資格取得のための必須の教育内容50項目のうちの一つである。本稿では、項目ではなく、科目と呼ぶ。

こともなかったということである。」と引用している。

1960年代に、国語教育史を専門とする飛田多喜雄は、『国語教育方法論史』（1965、明治図書出版）の中で、歴史的考察の価値と目的とは、新たに生まれてくる（筆者注：生起する史実）遺伝的典型と根源的状况を看破することであり、一般的法則や今日的課題を発見するところに歴史的解釈の意義があるという。また、方法論として、次の3点が重要であると述べる。

- ① 史的観点から、指導過程の発展的系譜を明らかにする
- ② 現場的観点から今日に継承し生かすべき方法技術は何かを探究する
- ③ 現在の問題的観点から、それが史的事実としてどう取りあげられていたかを究明する

日本語教育は、国内だけでなく、諸外国も対象とするため、各地の社会情勢や対日関係、さらには教育制度や入試制度といった日本語教育の需要を創出する社会背景について論じる必要がある。いずにせよ、国語教育や英語教育は、義務教育の制度の中の主要科目で、明治の時代から多くの実践や研究の蓄積があり、その集大成ともいえる研究叢書のセット数も膨大な量を数えるが、教育の歴史的考察の観点についても、すでに60年も前に示された内容は、現在の日本語教育の歴史研究の枠組みについて考察するさいにも参考となるものである。

こうした言語教育の歴史研究の役割を考慮しつつ、日本語教育史研究を振り返ってみたい。その例として、キリシタン時代と呼ばれる16～17世紀の宣教師による日本語学習をとりあげる。本稿でこの時代の日本語学習を例として取り上げるのは、教員の資格試験等での出題頻度の高さや日本語教育史をテーマとした書籍で必ず紹介されていること、また、関連の諸分野でこの時代に関する研究が、活発にすすめられ、出版が相次いでいることもその理由である。一方で、なぜ、400年以上も前の布教目的の宣教の時代が重視されるのかという疑問もあろう。すなわち、主要テーマの一つとされているにも関わらず、学ぶ意義が共有されていないのであれば、その疑問への回答として明らかにしておく必要があると判断したからである。

## 2. 宣教師の日本語研究が現在に語りかけるもの

宣教師による日本語学習というと、16～17世紀に来日したポルトガル人宣教師による日本語研究が知られているが、宣教師が土地の言語や文化を学び辞書や学習書を作成した歴史は当時にとどまらない。16世紀の大航海時代に来日した宣教師は、質量とも近世日本の日本語研究の粋を集めたとも言われる成果を残したが、日本が諸外国と和親条約や通商条約を締結する前に、日本語の研究をし、日本情報を収集していたのも宣教師だった。19世紀になり日本の開国の兆しを読み取った国々は、日本の前哨地ともいえる、マラッカ、マカオ、琉球に送り、辞書や文法書、聖書の和訳を作成させていた。開国後も、太平洋戦争終結後も彼らは常に真っ先に現地に入り言葉を学んだ。しかし、今でも、研究対象とされるのは、16～17世紀のキリシタン時代である。

キリシタン時代の研究は、19世紀にフランスをはじめとするヨーロッパや日本国内で着手され、日本研究者の間でも注目されてきた。本節では、まず、宣教師が残したキリシタン版（1591年にヴァリニャーノが持ち込んだ活版印刷機によってイエズス会が印刷した書籍）に関する研究史をたどる。次に、日本語教育史に位置付けられるようになった原点にさかのぼる。最後に、熊沢以降も日本語教育史の分野で研究がすすめられているが、昨今のキリシタン語学の研究成果を参考に、これらを取り上げる視点について指摘する。

## 2.1 ヨーロッパの人々による草創期の研究

この領域に注目した西洋人の中で、最も早期に着手した人物として、レオン・パジェス (Léon Pagès、1814年～1886年) とアーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow、1843～1929) があげられる。

パジェスは、日本語研究や日本のキリシタン史研究の開拓者であり、パリ東洋語学校の日本語初代教授にも推薦されたほど卓越した業績を有していた。特に、『日本図書目録』(1859) や、『日仏辞書』(1868) 『日本キリシタン宗門史』(1869) 『日本キリシタン迫害と日本遣欧使節記』(1873) を刊行したことで知られる (いずれも原文フランス語、のちに邦訳)。パジェスは、清国のフランス領事館勤務 (1847～51) 時代に、フランシスコ・ザビエルに関する史実に触れたことをきっかけに日本のキリシタン史に興味を持ったという。帰国後、ヨーロッパ各地を訪ねて日本に関する著書を調査し 800 点余りを整理したのが『日本図書目録』(1859) であった。日本語に関しては、17世紀のイエズス会宣教師による『日葡辞書』(1603) を仏訳し『日仏辞書』(1868) を刊行した。

彼のキリシタン史に関する研究の中で、代表的なものが、『日本キリシタン迫害と日本遣欧使節記』(1873) 『日本キリシタン宗門史』(1879) である。後者は日本語に訳され、『日本切支丹宗門史』(1938 吉田小五郎訳) として刊行されている。パジェスの著書は豊富な資料を提供し、後のイエズス会の日本布教史に関する研究の原点となった。

幕末に来日した西洋人の中にも、キリシタン時代の研究に取り組んだ者がいた。イギリス人外交官アーネスト・サトウはその一人である。彼は、『落葉集』(17世紀の宣教師の漢字字書) を入手したのをきっかけに内外で調査を行い、その成果は、『日本アジア協会紀要』(1879) に掲載された。帰国後ヨーロッパ各地でキリシタン関連の資料を調査し、『1591年から1610年の日本におけるイエズス会出版(図書目録)』(1888 原文英語) にまとめた。これに加筆訂正したものが『日本耶蘇会刊行書誌』(1926) として邦訳され、日本のキリシタン史研究に影響をもたらした。

## 2.2 日本人によるキリシタン時代の研究

サトウの書をたよりに、欧州留学中の日本人留学生が、キリシタン版に触れると、収集や翻刻、翻訳がすすんだ。その成果が発表されるようになると、明治から昭和初期までに、キリシタン史は、与謝野鉄幹、北原白秋、木下杢太郎、芥川龍之介ら、詩人や美術史家、文豪ら、各方面の人々の関心を集めた。東京帝国大学の姉崎正治 (1873～1949年) は、1905年に東京帝国大学に日本で初めて開設された宗教学講座で、学問としてのキリシタン研究の端緒を開いた。歴史学者の村上直次郎 (1868～1966) や岡本良知 (1900～1972) らは、『イエズス会日本年報』(1944) を翻訳し、内外の資料を駆使した研究を行い、資料集や研究書の蓄積に貢献した。こうして、キリシタン時代の資料に基づいた研究は、日本史や宗教学にとどまらず、経済史、美術史、音楽史、国語学や国文学など、多くの分野に広がった。

ヴァリニャーノがもたらした活版印刷機は、禁教令が出されるまでの20数年の間に50種(推定)に及ぶ書物を世に送り出したが、「鎖国」下の江戸時代には忘れ去られていた。しかし、19世紀になると、パジェスやサトウによって文献の存在が知られるようになり、その後、日本では、キリシタン文献の翻刻、邦訳がすすみ、各分野で研究の端緒が開かれていったのである。

## 2.3 国語学の分野で

国語学の分野では、早くからキリシタン文献に着目し、新村出、橋本進吉らも研究に携わった。土井忠生 (1900～96) の『吉利支丹語学の研究』(靖文社 1942) や『十七世紀初頭に於ける日本語の発音』

(1937)などは、近世の日本語の姿を明らかにし、国語史に貴重な知見をもたらした。ポルトガル語、ラテン語をはじめ、複数の西洋の言語に通じた土井は、『日葡辞書』(原著は1603年刊行、1960:邦訳)、『日本大文典』(原著:ジョアン・ロドリゲス、1955 訳注)など、当時の辞書や文典を邦訳、注釈を加え、後世の研究に道を開いた。

1970年代には、福島邦道が辞書の解題を行っている。『日仏辞書解題』(1974)(前述のレオン・パジェスが『日葡辞書』を仏訳した『日仏辞書』を解説したしたもの)や『羅葡日対訳辞書』の解題(1979共著)(『羅葡日対訳辞書』はイエズス会が1595年に作成した初の日本語辞書)である。国語学、日本語学の分野では、多くの研究者が取り組み、以上は、当時の成果の一部にすぎない。

## 2.4 1970年代以降の日本語教育の視点からの研究

キリシタン文献をもとにした研究が、国語学の分野では早くから取り組まれ、国語史に新たな知見を加えてきた。キリシタン文献とは、日本語を母語としない宣教師が外国語としての日本語や日本文化の研究を学ぶための書籍を含むものであったのだが、日本語教育に携わる研究者たちはどうだったのだろうか。筆者の知る限りでは、これに注目しはじめたのは、慶應義塾大学で留学生に対する日本語科目を担当していた熊沢精次(1932~)で、1970年に始まる。それ以降の発表年と論文タイトルをたどると次のようになる。

- 1970 キリシタンの日本語学習『日本語と日本語教育』2<sup>2</sup>
- 1972 「日葡辞書」の葡語説明文中の日本語 『日本研究』1
- 1972 「日葡辞書」の文法注記-1 『日本研究』2
- 1973 ロドリゲスの日本語教育観『日本研究』3
- 1976 日本語辞書の編纂 - 日葡辞書の場合(1)『日本語と日本語教育』5
- 1978 日本語辞書の編纂 - 日葡辞書の場合(2)『日本語と日本語教育』7
- 1982 日本語学習書としての「ロドリゲス日本大文典」の価値 『日本語と日本語教育』11

1970年の論文は、『切支丹語学の研究』(土井忠生)や『日本通信』(イエズス会士)、『日本史』(ルイス・フロイス)などを中心に、宣教師の日本語学習について紹介し、「キリシタン文献は今日、国語史の上で、中世日本語の研究にとって欠かすことのできない資料となっている」と結んでいる。西洋人による日本語教育の歴史という文脈を作り上げた画期的なものである。以降の論文でも、1973年の論文以外は、辞書の中の用語や学習辞典としての工夫、文法の説明、文法観など言語面が中心的なテーマとなっている。

1980年代に作成された日本語教育史年表に次のものがあるが、いずれも、1251年から1893年については、熊沢が担当している<sup>3</sup>。

---

<sup>2</sup> いずれも、慶應義塾大学国際教育センター発行。

<sup>3</sup> 1894年以降は斎藤修一(慶應義塾大学)が担当している。斎藤は、「日本語教育の現場」と題し鈴木忍や富田孝行らと討論会を、また、「日本語教師大いに語る、海外の日本語教育の問題点」では、アルフォンソ(オーストラリア国立大学)、ジョーデン(コーネル大学)、ミラー(ワシントン大学)、駒井(シカゴ大学)、オリガス(パリ大学)らと討論を行うなど(『国際交流』16,18,1978)70~80年代にかけ活躍した。斎藤修一は、熊

1982 付録 日本語教育年表 『日本語教育事典』日本語教育学会編 pp. 781～792

1986 年表・世界史の中の日本語 『国際交流』国際交流基金 pp. 44～51

この二つの年表は、後者には主要項目に説明が加わり内容理解をうながすものとなっている<sup>4</sup>。

熊沢の研究は、その後、幕末明治期のフランスの日本語学者、レオン・ド・ロニーや来日西洋人の文字観や文法観に関する研究へと広がっていく<sup>5</sup>。なお、『講座日本語と日本語教育 15 日本語教育史』木村宗男 [編] (1991 明治書院) に収録された「16 世紀から幕末開港期までの日本語研究と日本語教育」は、キリシタン時代から、帝政ロシアやヨーロッパ、幕末の来日西洋人の日本語研究までの展開を紹介するもので、この記述内容から、西洋人の日本語学習史を記述する際の最初期の必要な論考として、位置付けるべきであろう。

このように、キリシタン文献を西洋人の日本語学習史として位置づける研究は、国文科、仏文科で学び、フランス語やポルトガル語の知識のあった日本語教師、熊沢によって、1970 年代に着手されたのである。熊沢は、慶應義塾大学の各部署で日本語教育を担当していたという<sup>6</sup>。1970 年代という時期は、一部の大学において日本語教育機関の設立が始まった時期であり、慶應義塾大学では、他大学に先駆け、1964 年、国際業務を担う国際センターが発足し、留学生に対する日本語教育に専任教員が配置されるようになった時期である。このことから、日本語教育という分野が確立されてからほどなくして着手されたことがわかる。

しかし、この時代の日本語教育史研究の対象は、辞書や文法書、文法観に関するものであった。その後、日本語教育の分野でキリシタン時代を対象とした書籍が刊行されるようになった。馬場良二の『ロドリゲスのエレガンス―イエズス会士の日本語教育における日本語観』(1999) がある。これも筆者のラテン語やポルトガル語の知識に基づくもので、16 世紀のヨーロッパに流布していたラテン語の文法書と比較し、ロドリゲスの『日本大文典』で多用されているエレガンスという言葉から、彼の日本語観、日本語教育観を探るものである。このほか、ロドリゲスの文典を取り上げる書籍に、青木志穂子の『近世・近代西洋人からみた日本語敬語研究』(2018) がある。これらはいずれも、日本語の敬語法や待遇表現に焦点をあてたものである。今もなお、キリシタン時代を対象とした研究成果が刊行されているが、言語面以外に、教育現場の視点から当時の史実を扱う可能性について論じていきたい。

---

沢精次とともに、日本語教育史談会（日本語教育史研究会の全員）のメンバーである。

<sup>4</sup> 1986 年に加わった内容は、例えば、1563 年にはドアルテ・ダ・シルバが追加され、「シャビエルの来日後、次々に宣教師が渡来したが、その中でシルバはもっとも日本語学習に励み、自己の勉学を基として最初の日本文法書「日本文典」及び『日葡辞書』を編纂したと伝えられる」との説明が加えられた。1577 年のジョアン・ロドリゲスの項目には、次の内容が追加された。「来日後、イエズス会に入会。日本語に熟達するに及んで、通訳として当時の為政者、秀吉、ついで家康とイエズス会との交渉に関与し、両者の知遇を得て活躍した。1613 年家康のキリシタン追放令によってマカオに追放された後も明国との交渉に活躍したが、1634 年マカオで病没。40 年間にわたる日本滞在中、「日本大文典」を著すなどキリシタン宣教師の日本語教育において中心的役割を果たした。追放後、マカオで「日本小文典」(1620) を編む。」

<sup>5</sup> 「フランスの日本語教育史--レオン・ド・ロニーを中心に」『日本語教育』60 号 (1986) 「ロニーの 1854 年の教科書について」『日本語と日本語教育』16 号 (1987) など。

<sup>6</sup> 長谷川恒雄慶応大学名誉教授のご教示による。

### 3. 日本語教育史研究での視点

#### 3.1 宣教師の日本語力の評価法

歴史学者の高瀬弘一郎（1937～ 慶応義塾大学）は、スペイン・ポルトガルの政策やカトリック教会の経済基盤について内外の資料を駆使した研究を行ってきた。比較的最近の『キリシタン時代のコレジオ』（2017）では、教育機関である各地のコレジオ（学林）を対象に、教育の体制や内容について詳細に記している。教育の成果として、当時の宣教師たちの日本語力に注目している。

高瀬は、各種名簿の中のイエズス会士各人の日本語能力の評価に関する記述に焦点をあて、年代別に列挙している。具体的には、「告解を聴くには充分日本語を解す」「日本語をよく解し、日本語で説教する」「日本語を非常によく解し、日本語で説教し、日本語で文章を書く」「日本語を非常によく解し、日本語を教え、半ば日本語で説教する」などである。すなわち、「文章を書く」「説教する」「告解を聴く」「日本語を解す」など、具体的に何ができかが記されている。程度に関しては、「非常によく」「よく」「中位に」「いづらか」「ごくわずか」という用語を使用しているという。高瀬は、ここで、「日本語を中位に解し、告解を聴く」という表現から、中位にしか理解できなくても告解が聴けたということから、告解が聴けるのは、最低の条件であったのではないかと推測する。

日本語教育の視点から注目したいのは、評価の基準として、宣教師の日本語力が、何がどの程度できるかということに注目していた点である。この内容から、彼らがどのような場面で日本語を必要としたのかを知ることができると同時に、小川（2020）では、これを現代の CAN-DO STATEMENT に通じる評価法の原型見ることができるとして紹介した。この評価をもとにした考察として、次のような点からの分析も可能であると思われる。

初期の宣教師に、『日本史』を書いたことで知られるルイス・フロイス（1532～97）がいる。彼は、日本語に長け通訳として、織田信長や豊臣秀吉にも面会して布教の許しを得たことでも知られているが、イエズス会の記録では、フロイスの日本語力の評価は決して高くないという。当時の記録は、それぞれの用語の基準もあいまいであるという点、評価者による相違、時代による相違点など、一定していない可能性なども考慮する必要がある。しかし、同時期に、一人一人を複数の視点から見ると、一定の傾向が見えてくる可能性もあろう。この名簿には、日本人の修道士の能力の評価も記され、各地のコレジオでの教育内容の詳細も明らかにされているので、教育の方針や形態とその成果、求められていた成果との関連についても、今日との比較の視点やヒントが得られる可能性もあろう。

#### 3.2 共に学ぶ教材

キリシタン版には、ポルトガル人宣教師や日本人信者を対象とした教義書や語学書、文学書が含まれる。信者を獲得するに最も重要な書目が、日本人向けの教義書であったと思われる。その教義書の中には、書名は同じでだが、国字版とローマ字版の両方で刊行されたものが存在する。その一つに、修養書『イミタティオ・クリスティ（キリストにならいて）』のキリシタン版 *Contemptus mundi*（1596）の邦訳がある。それぞれ、ローマ字本『コンテムツスムンヂ』（1596）、国字本『こんてむつす - むん地』（1610）として刊行された。小島（1989）によると、前者が修道者用（ポルトガル人宣教師：筆者注）、後者は一般信者（日本人信徒：筆者注）と読者を限定し、分量的に、国字本はローマ字本より少なく、ローマ字本の抄本になっているという。小島は、どのようにローマ字本から国字本に書き換えられたのかという点について、用語や表記など言語の面から詳細な考察をしている。

このほか、ローマ字版と国字版を持つものに、ドチリナキリシタン (*Doctrina Christiana*) がある。

ローマ字版「ドチリナキリシタン」はヨーロッパ人の日本語学習用、国字本「どちりなきりしたん」は日本人信者の教理書として用いられた。日本語教育の視点から見れば、布教の根幹ともなる教義書が、ローマ字と国字の二つの異なる表記で書かれた版が用意されていたということは、国字が得意でないヨーロッパ人と内容に不案内な日本人が、互いに教義を学びあう形ですすめられたと推測される。小川（2020）は、現代のピア・ラーニングの源流であると位置づけた。

ピア・ラーニング用の教材として見た場合、この両者にはどのような書き換えが行われていたのか、現在のピア・ラーニング用の教材、書き換えの内容など、現代の考え方を振り返る際の有効な事例となるのではないだろうか。

### 3.3 教材化する素材の選定

日本語と日本文化を学ぶ学習書に、『天草版平家物語』（1592 天草コレジオ）がある<sup>7</sup>。正式の題名は、「日本のことばと Historia を習ひ知らんと欲する人のために世話に和らげたる平家の物語 FEIQE NO MONOGATARI」であり、日本人修道士であり彼らの日本語教師を務めた不干（斎）ハビアン（1565～1621）が編集、抄訳したものとされている。この宣教師の日本語学習向けに編集された読み物は、日本語がポルトガル式ローマ字で書かれているため、かな書きの文語文では分からない室町時代の日本語の話し言葉や発音を知る手がかりとなるという点で、古くから国語音韻史の分野で注目されてきた。たとえば、「にほん」を「NIFON」とするなどハ行の子音は「F」で表現していることから、「ファ、フィ、フウ、フェ、フォ」に近い音だったと類推されている。こうした点においても日本語史の分野では一級資料として扱われている。

しかし、この書が日本語日本文化の学習書であるという点から考えれば、日本語教育史においても一級資料である。著者のハビアンは、教養豊かな禅僧であったが、キリスト教に改宗し、天草のコレジオで日本語教師を務めていた。彼は、キリシタン版の作成に尽力するとともに、『妙貞問答』（1622）を著し、神道や仏教を批判しキリスト教の教理を説いた。仏教が浸透する日本でキリスト教を広めるには、対仏教論争は最大の難関であったが、ハビアンはそこで中心的役割を担った。彼は、日本語や仏教に関する知識の伝授し、説教や交渉など、布教をすすめるための支援に献身的に尽力し、教会に絶大な貢献をした。言い換えれば、日本語教師のハビアンは、彼らの来日目的を叶えるために奔走したのである。

さて、ここで、現在の日本語教育者としての彼の活動に注目したい。はじめに、教材作成にあたり、数ある古典の名著の中で、『平家物語』を選んだ点である。平家の盛衰を描いた軍記物には、根底に仏教的無常観、日本人の人生の教訓がちりばめられ、日本人の死生観や思想を知ることができる。次に、名文「祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり…」の書き出しではなく、二人の人物による対話形式で抄訳され口語体を用いている点である。『平家物語』という名著を鑑賞する読み物として扱うのではなく、日本人信者の思想や慣習を踏まえて、告解を聴いたり説教を行ったりと、布教に必要な知識と言語能力を向上させるため、徹底した実用主義を貫く日本語教育にかなった教科書であったと思われる。本書は、まさに、イエズス会の方針、日本の風俗を知り言語に熟達するという目的に沿うものであった。

---

<sup>7</sup> 大英図書館所蔵天草版『天草版平家物語』『伊曾保物語』『金句集』が、国立国語研究所のウェブサイト<sup>7</sup>で無料公開されている。この3冊は、ハビアンの編集によるものである。

### 3.4 専門日本語教育からみた日本語教師と今後の当領域の可能性

以上の点から、当時の日本語教育を現在の専門日本語教育の成功例として位置づけることができよう。その成功を支えたのは日本語教師であった。日本語教師の中で大きな役割をはたしたのが、ハビアンのような、彼らから洗礼を受け改宗した元仏僧たちであった。仏教の弱点を知りつくした元仏僧たちが、彼らから洗礼を受けて改宗し彼らの日本語教師をつとめたのである。宣教師、日本語教師双方が、自分たちの思想や信条、すなわち、戦国の世にあつて、心のよりどころを求める人たちの支えになることへの願いを共有していたとすれば、日本語教師たちは、宣教師たちの来日目的である布教のパートナーであり良き支援者であったと思われる。

本史実から、専門日本語教育の成功要因の一つとして、学習者の日本語学習の目的に対する共感や共有という点を加えることができよう。学習者と教師のマッチングについては、時代を超えてその重要性が認識されてきたのではないだろうか。このように、キリシタン時代の日本語学習を紐解いていけば、歴史の中の「成功」例の一つとして、今日の課題を考察する際のヒントが見出せるよう、史実の見方を提供することも重要である。

当領域は、西洋の言語に長けた熊沢が日本語教育史に位置づけて以来、昨今では、待遇表現など言語行動や言語観に関する研究が行われるようになってきた。しかしながら、外国語としての日本語の学習方法、教師の役割、教材作成の基本理念、評価法などにも着目すると、現在の学習理論に通じる発見の可能性、また、事例となりうるものも多い。実践面での本格的な研究は、今後に期待されるところである。

### 4. おわりに

戦乱の世にあつて「日本語を中位に解し、告解を聴く」ことのできる宣教師に出会い、彼らの言葉に耳を傾け、そこに心の救いを見出した人々はどれほどいたのだろうか。資料が発見されれば、日本語教育の歴史にもあらたな解釈が加わるかもしれない。

研究者は、歴史資料を手にとるとタイムスリップしその世界に没入してしまいがちだが、実学としての日本語教育学を目指す人に向けて、その史実を現代の視点からも取り組めるような作業を行うことも一方で必要である。日本語教育史研究で得た知見が、現代の課題解決や未来を築くためのヒントとなれば、史実から学ぶ、学べる史実、学びたい歴史へと発展する可能性も生まれ、歴史を振り返るコツや楽しさが共有されていくことも期待されよう。

日本語教育に関する史実は、美術史や英学史などの領域でも明らかにされている。他領域のそれぞれの歴史研究の成果を共有することは、領域の拡大と深化につながる。

江利川（2022）は、「英語教育に関連する諸分野にも意識的に視野を拡大することで、自分の研究を英語教育、教育全体、および社会や歴史の中に位置づけるマクロな視点が必要ではないだろうか。」

（2022年12月兵庫教育大学における言語表現学会講演会「これからの英語教育のために過去から学び現状を問う」）と述べるが、日本語教育史研究がマクロな視点を提供する役割を担うには、研究の領域を広げ精度を高めていくことが重要であろう。

#### 【参考文献】

江利川春雄（2008）『日本人は英語をどう学んできたか』研究社

江利川春雄（2022）「日本における英語教育学と英語教育研究組織の発展史」『中部地区英語教育学会紀要』

51 卷

小川誉子美 (2020) 『蚕と戦争と日本語—西洋人の日本理解はこうして始まった』 ひつじ書房

小川誉子美 (2022) 『開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった』 ひつじ書房

小島幸枝(1989) 「コンテンツスムンヂの用語—ローマ字本と国字本を比較する」『ビブリア』92 天理図書館  
報

高瀬弘一郎 (2017) 『キリシタン時代のコレジオ』 八木書店

府川源一郎 (1995) 「提案二、なぜ今、「国語教育史研究」が問題になるのか、またそれを問題にしなければ  
ならないのか」『国語科教育』42 巻 全国大学国語教育学会

三輪地塩 (2023) 「キリシタン研究の現在 —キリシタン・イメージの形成とキリシタン・ブーム に関する  
考察」『基督教研究』85 (2), 基督教研究会